井の国歴史懇話会報

VOL8

発行：井の国歴史懇話会事務局　発行日　平成 27　年 1 月 1 日

新 年 の ご 挨 拶

徳川宗家　恒孝氏の講話と 来年度に向けての研修展望

井の国歴史懇話会会長　武藤全裕

日本は英国と同じように海に囲まれた素晴らしい国。海のおかげで外国に侵攻されることなく、中国よりの文化を吸収し、どくじの日本文化を積み重ねてきた国です。この素晴らしい日本文化を日本人は学んでほしい。

徳川氏宗家十八代恒孝氏の低音で静かな語り口調の講話が始まる。

「浜松時代の家康はラッキーに恵まれました。三方原の合戦で大敗したが、合戦のすぐあと武田信玄が死にました。天正九年高天神城を奪い返し、武田軍とのおしくら饅頭が終わります。天正十年本能寺の変もラッキー。同盟者で心を通わせていた信長ですが、家康にとって頭が上がらない人物でした・・・・・」と淡々とお話は続きました。

さて、来年はいよいよ徳川家康公没後四百年祭の年を迎えます。この年に合わせ私は、家康公のナンバー2と称される浜松市井伊谷、出身の井伊直政を会員の皆様とともに浜松市民に大いに広報したいものと願っております。

来年度の実地研修の候補地の一つとして、「天下分け目の古戦場関ヶ原」を考えております。東軍の井伊直政の陣・福島正則の陣等。西軍の石田三成の陣・松尾山小早川秀秋の陣・島津隊の陣等の実地学習、直政が島津の兵に討たれ落馬したという「烏頭坂」などの実地研修のコースです。

本年度当歴史懇話会主催の催しに協力下さり、誠にありがとうございました。来年もよろしくお願いいたします。

幕末悲劇の女性「村山たか」女の生涯をたどる

長田

なぜ、たか女

船橋聖一氏の小説「花の生涯」の女主人公村山たか女が、晩年終の棲家として、金福寺に入寺しました。寺の入り口に弁天堂を建立し、井伊直弼公・長野主膳息子の多田帯刀の位牌を置き、日夜その冥福を祈っていたそうです。

「村山たか」女について調べていらした「幕末秘禄」の著者でもあり、京都東山一乗寺にある金福寺の住職の小関魯庵師から、私の父が「たか」女のひ孫であると聞かされ、何度か金福寺を訪ねて、話をお聞きしたことが、きっかけとなり「村山たか」女の波乱万丈の生涯を調べてみることにしました。

たか女の足跡調べ

たか女に関する資料は乏しく、彦根城400年祭でお会いした「たちばな会」の西村忠先生も直弼公とたか女の間に娘がいたことは知らなかったとのことでしたが、手掛かりがあるかもと言うことで、多賀大社前の不二屋さんと山田精肉店さんを紹介してくださいました。この2軒は、たか女の母親藤山くにの実家とたか女が養女となったところです。

足跡をたどる資料は、小関魯庵師の「幕末秘禄」、井伊直中が建立し、五百羅漢、直弼公、主膳の墓と、たか女の碑がある天寧寺からいただいた多賀町の元町長さんの林清一郎氏がまとめられた『幕末悲劇の女「村山たか女のこと」』、不二屋さんから頂いた資料、あとは、船橋聖一氏の小説「花の生涯」、諸田玲子氏のノンフィクション小説「奸婦にあらず」を参考にいたしました。

実際に訪れお話が聞けたのは、金福寺・天寧寺・高源寺（晩年のたか女の肖像画がみつかったお寺）

・不二屋さんで、あとのところは、期待した答えは得られませんでした。しかし、林清一郎氏が、多賀町史をまとめる際、たか女が立ち寄ったところを写真に収めていただいたものが残っています。

たか女の足跡

1847年頃、たか女は、孝明天皇に仕える駿河局に出仕、その後、駿河局がたか女を介して主膳との歌の交流から、孝明天皇・駿河局・たか女・主膳の関係ができ、後日、井伊大老の幕政を進める上で朝廷の連絡に、役立っていったといわれています。

1853年6月3日、彦根藩の警備担当地浦賀沖に、ペリー提督の率いる4艘の米艦隊が投錨しました。翌年、藩は相州と京都守護の兼任を命じられ、直弼公は大老職に就きましたが、米国との通商条約・将軍家定の後任決定等、崩壊寸前の幕府を1人で支えるという大変な宿命を負っての大老職就任でした。

この時期より、たか女は尊王攘夷派への対策をたてるため、彦根藩京都所司代・長野主膳の手足となって隠密活動を始めました。たか女は、京に滞在し、駿河局の侍女という立場や芸事で知り合った多くの人から、様々な情報を手に入れ、主膳に連絡し、ひいては直弼公のため智謀のある限りを傾け、立ち働きました。

安政の大獄への加担とその後

1858年6月19日　日米通商条約調印

6月25日　将軍家定の後継者紀州慶福に決定発表

7月6日　家定死去

8月8日　孝明天皇が水戸藩に幕府不信、幕府変革を命じた勅書を出します。

以上の事柄を発端とし、大老直弼公の幕政に事々に反対する水戸藩を中心とする反幕府運動の関係者の捕縛が始められ安政の大獄が始まりました。

安政の大獄の後、水戸・長州・薩摩の藩士や、勤皇の志士の反撃となって、桜田門外での井伊大老の暗殺、京都での勤王派天誅組の活躍へと時代は移って行きました。

直弼公の不遇の死による御家断絶を止めるため、主膳は大きな働きをし、彦根藩の藩主相続が認められました。そして、たか女と主膳は、生前直弼公が進めていた「公武合体」の実を上げるための、皇女和宮の第14代将軍家茂への降嫁のため、立ち働き成功させました。1862年、幕府の中心が、反井伊大老の情勢に変化したのを受け、彦根藩の中も様変わりし、主膳は、断罪され、葬儀も許されませんでした。一方たか女は、天誅組に捕らわれ、三条大橋に縛り付けられ、生晒しにされましたが、3日後、皇室ゆかりの宝鏡寺の尼さんに助けられ、後に金福寺に入寺しました。

明治9年9月30日、金福寺で68歳の波乱万丈の生涯を終えました。

年号	西暦	年令	事項
文化六	一八〇九		たか女の父は多賀社尊勝院の院主で彦根近郷多賀神社般若院に程遠からぬ滋賀県犬上郡藤山くにの家に生る。若くして二条家と九条家に仕える。
文政九	一八二六	一八	井伊直亮の侍女となる。
十二	一八二九	二十一	侍女を辞して祇園で芸妓となる。
天保二	一八三一	二十三	金閣寺の世話になる。
四	一八三三	二十五	帯刀を生み常太郎と名づける。
六	一八三五	二十七	多田一郎と別れ般若院に帰る。
十	一八三九	三十一	埋木の舎に出入し、直弼の寵愛を得る
十二	一八四一	三十三	長野主膳と知り合う
弘化三	一八四六		直弼江戸へ出府す。
四	一八四七	三十九	弘尚館を開いて居た主膳に入門。
嘉永六	一八五三		ペリー浦賀に来航し開港せまる。
安政五	一八五八		直弼大老となり日米通商条約調印さる。その頃たか女京都に於て隠密となって活躍す。安政の大獄行なわる。
万延一	一八六〇		江戸城桜田門外の変起り直弼殺さる。
文久三	一八六三	五十四	洛西一貫町で長州・土佐藩激徒に捕われ三条鴨川で生晒しにされ三日後助けられ、尼となり金福寺に入り名を妙寿と改める。
慶応三	一八六七	五十九	当寺に弁天堂を建てる。
明治九	一八七六	六十八	当寺に於て歿し、円光寺に葬られる。法名は清光祖省禅尼

村山たか女略年譜

（京都　金福寺提供）

戦いを避け、山に入った寺野の伊藤一族の伝説

柴田宏祐

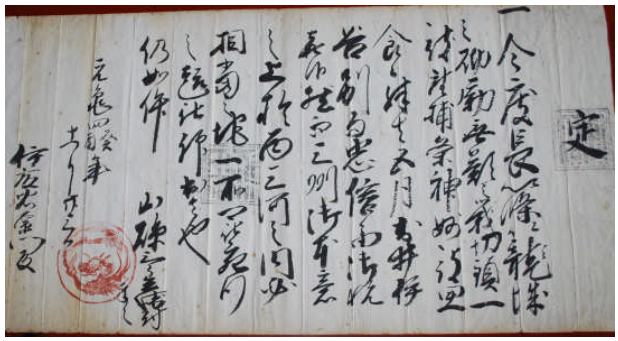
落人の里

「寺野ひよんどり」として名を知られる寺野は浜松市北区引佐町にある戸数四十戸程の小さな集落である。山一つ越せば三河に至る遠州の西端の山深い地にある。今でこそ三遠道「浜松寺野インター」を抱える交通至便の地になったが、これまでは渋川から山坂を越えなければならず、また三河からは高い山並みを幾つも越えなければならない僻遠の地であった。集落の地に立つと南は深い谷間となり、その斜面に人家が点在していることが一望の内に見渡されてくる。日当たりが良く、屏風のよう取り囲む山々にさえぎられた桃源郷に達した感をいだかせてくれる。世の喧騒を避けて、隠れ住む地を彷彿とさせてくれる。まさに、寺野が「落人の里」と呼ばれたことが納得されてくる。

幾山川を越えて山へ上ってきた武士の一団

曽我の仇討ちで、有名な曽我氏の系譜を引き、伊豆が発祥といわれる伊藤一族の分流は鎌倉末期には三河に住み、戦国期には武士として戦いの毎日を送る生活であった。この伊藤一族が打ち揃って三河から山川を越え、寺野に入ったのは三遠に戦乱渦巻く、天正三年（一五七五年）であったという。その時は、武田と織田・徳川連合軍が、激突した長篠合戦の直後である。

武田氏の重臣山縣三郎兵衛昌景から元亀四年(一五七三)に伊藤忠衛門に宛がわれた所領安堵状が残されている。忠右衛門は寺野の初代伊藤刑部祐雄の兄弟である。それなりの働きをした場合三河に城を与えるという内容であった。結果的に武田軍は破れ、空手形になってしまった。それまでの戦乱に明け暮れていた生活に無常を感じ、平穏な地を求めてきたという伝承が伝えられ、今も初代の木像を前に一族の祭りを続けている。



村を起こした五兄弟

寺野の初代伊藤刑部祐雄は自分の五人の息子を寺野の村の各地に配属して芝切り（開拓）をさせていった。本家筋はこれまでの伊藤を名乗らせたが、次のように松本、今田の苗字を与えそれぞれに独立性を認めていった。寺野は峯・東・西の三隣保に分かれていて、近年移住してきた家を除くと、峯は全て松本、西は伊藤と今田、東は全て伊藤というように伊藤・松本・今田姓で村が構成されている。三つの姓を名乗るようになったのは、明治以降で、それ以前は伊藤姓だった。

現在でも五人の息子たちの系統は明確で、村の構成の重要な役割を果たしてきた。一族が助け合い、血を絶やさないことを目指した初代の思いは生き続けてきた。

伊藤刑部祐雄

長男）	祐国……伊藤…幸夫	弥兵衛	現当主
次男）	刑部五郎……松本…由孝	久兵衛	
三男）	弥五郎……伊藤…恒夫		
四男）	刑部作祐久…伊藤…他出	道迪	
五男）	九郎作……今田…年啓		

姓　屋号

文化の灯をともし続けた一族の執念

たどり着いた山上での生活は耕地が少なく厳しいものであったと思われるが、文化に対するあくなき執念は絶えることなく、引き継がれていった。平年でも食べることに精一杯

であろうし、ひとたび災害が起これば、食にこと欠くことが推測される中で、鄙にはまれな文化を担ってきたことに驚かざるをえない。

その一つが「寺野ひよんどり」である。その発祥は、伊藤氏が三河から持ち込んできたかもともとこの地にあったものを引き継いだかは定かではないが、「能衆」として一族が役割を分担して祭事や芸能を伝え、今は国指定の重要無形民俗文化財に指定されている。

祭事そのものだけでなく、それに使用する衣装の染や面の制作にあたっていることである。寺野ひよんどりに使われている十七面は、伊藤弥兵衛定俊制作の面が現在も使用されている。神澤おくないに使う面にも寺野伊藤弥兵衛の名が見られる。幾つかの三遠一帯の山あいに残る田楽や神楽等の面を必要とする祭の担い手を果たしていたのではないかと思われる。

二つ目は涅槃図の制作である。現在、渋川の東光院と熊の光雲寺の二ヶ寺に寛保二年の伊藤弥兵衛祐俊の筆になる涅槃図が残されている。大本山奥山方広寺にも寄進していると伝えられているが、現在は見当たらない。明治の大火で焼失したのかもしれない。大幅の画面に何十という人や動物を配置するための技法は高度なものを有していたと思われる。定俊、祐俊は親子であった。

時を経て、明治になって渋川に洋風の学校校舎建築をしたのは、本家の伊藤氏であった。田沢小学校の建築も同様であったという。

更に、昭和になり、二十代伊藤信次氏は六十歳になって日本画を習い始め、春秋合わせて二十回余の入選を果たしている。その息子八右氏は能面師として活躍している。深い山中にありながら数百年にわたって、文化の灯をともし続けてきた伊藤一族の執念に敬意を表さざるをえない。伊豆の豪族伊東氏の流れをくみ、一族の中に山間部に移住して芸能を維持してきた者もある。例えば、信州新野の雪まつりと大きく関わっているといわれている。伊豆伊東氏の中から輩出した狩野派のDNAの流れまでを想像してしまう。

戦乱に明け暮れる世にいち早く別れを告げ、平穏な暮らしを求めて入り込んだ山の中でも一族の出自を伝える肖像画や木造等の史料を数多く残し、伝承が息づく「落人の里」は気品のある心優しい里人に囲まれて今も歴史のロマンに満ちている。

祐俊の涅槃図　東光院

26年度の予定　（敬称略）

1月22日（木）　13;30～15;30
講話「山深き里に香る文化の流れ」
～寺野伊藤一族の伝説･･･涅槃図と能面～
講師　柴田宏祐

1月18日（日）　浜松市みおつくし文化ｾﾝﾀｰ
13;30分開演　12;30分（開場）　￥1,500
小和田哲夫氏講演
「徳川四天王　井伊直政の生涯」

2月14日（土）　8;30～17;00
「龍潭寺住職と歴史にふれる旅④」
現地研修　涅槃図と渋川井伊氏の史跡拝観ﾂｱｰ
会費　¥5000

2月22日（日）
みおつくし劇団「風雲！井伊の牙」
浜松市みおつくし文化ｾﾝﾀｰ

4月7日　13;30～
総会（予定）